

# 本草学 大家

## 加来飛霞研究の現状

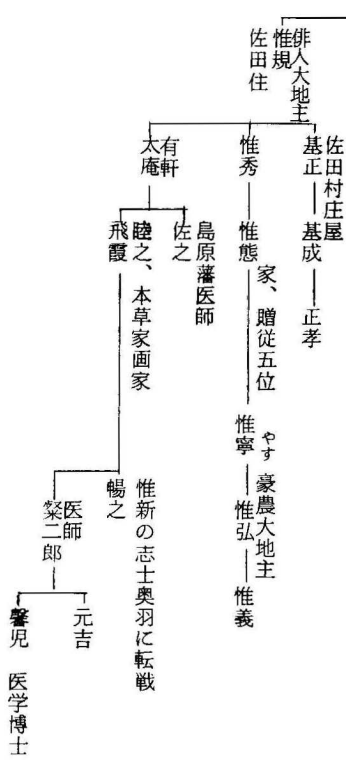
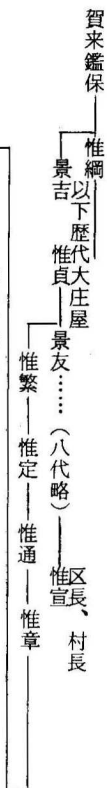
### 大 隈 米 陽

嘗つて県教育会が編纂した「大分県偉人伝」には県下の各界に活

躍した偉人傑士二五四名の伝記が載せられているが歴代藩主は別と

して一族近親から四名を記録されているのは他に例がないと思う。

大分郡賀来城より佐田に移る



即ち安心院町佐田の賀来惟熊、有軒、佐之、飛霞である。

賀来一門は大神姓で佐田村で最も繁栄した一族である。島原藩山

藏組大庄屋賀来氏、大砲鑄造国防貢献の廉で贈従五位賀来惟熊、歴

代医家で三浦梅園の門人賀来有軒、その両子で兄佐之は島原藩医で

帆足万里、シイボルトに学んだ。弟飛霞は万里に学び本草学の三大

家といわれた。

略系を示すと

かく一族から多彩な人材を出している。現在も古川に水多しの譬えの様に沢山の人材が輩出している。

賀来飛霞通称陸三郎、睦之、郷党専ら飛霞を以て行わる。父有軒は通称太庵、帆足萬里と友人で又三浦梅園、小野蘭山に学んだ。兄佐之は異母兄で号毅篤島原藩医員となり、帆足万里、蘭医シイボルトに学んだ。

飛霞は有軒の第三子で母は杵築藩士鈴木弥惣右衛門公豊の四女政である。文化十二年（一八一五）島原藩領である豊後高田市で生れた。父有軒が会所で医を開業していたからである。

爾来四国に九州は日向、島原に東海道から関東、奥羽、北陸、京阪付近と山嶽を除いて全国を周遊、本草研究写生に精進した。

本草と云っても薬草丈でない。採集は残された画譜に拠れば草木、虫魚類、鳥類、菌類、奇石、鉱物から民俗歴史と多方面に亘った。

明治十一年上京して東京大学小石川植物園取調係となり伊藤圭介と共に明治十九年職を辞する迄研究に専念し日本植物学界の草分け的存在となった。廿一年佐田に帰り花鳥風月を友とし医療に従事し

画業にも精進し本草学の大家として又画家としても一家をなした。

廿七年（一八九四）三月十日佐田に没した。墓は大且尾字立中山の先栄にある。墓誌の撰者は帆門の同友宇都宮健哉である。碑表の文

字は伊藤圭介の筆である。

飛霞の伝記で刊本となっているものは

- 一、平風社版「大日本人名辞典」
- 二、大分県刊「大分県偉人伝」
- 三、小野精一著「大宇佐郡史論」
- 四、安心院町刊「安心院町誌」

- 五、賀来惟達編「大神姓賀来系譜」
- 六、大隈米陽編「佐田郷土史上巻」
- 七、全編「宇佐山郷先達伝」
- 八、小野精一著「三浦梅園書翰集」
- 九、全氏著「帆足万里書翰集」等である。

稿本のまま残っているものは

- 一、飛霞翁伝 嗣子祭一郎氏稿
- 新聞連載で出版計画中のもの
- 一、沢武人著「日向採薬記の周辺」一一一回
- その他新聞雑誌に掲載されたもの若干

一、碑銘「博物名家賀来飛霞翁大人碑」宇都宮健哉撰飛霞の遺稿  
については自分は「佐田郷土史」に碑文を聚録し又賀来飛霞研究  
に「本草学大家賀来飛霞」「遺稿について」「略年譜」「県下に

於ける植物古文献」「帆足万里と佐田文化」「本草家万里の片鱗」  
を載せ遺稿に就いては便宜上左の様に分類した。

(一) 採葉記

1 油布嶽採葉図譜

題筆は伊藤圭介、自序に万里の朱の書入がある。三卷全頁に

草木鳥類等の写生画を挿入してある。天保十一年稿。

2 杵築採葉記 一卷

杵築侯の依頼で藩内植物採集記、三浦梅園の展望記もある。

嘉永五年稿

3 日光採葉記及附図 一卷

4 島原採葉記 二卷 天保十四年稿

5 日向採葉記(一名高千穂採葉記) 五卷

延岡内藤侯の嘱で藩内(宮崎県の北半部)の植物採集記

民俗学上よりも注目すべき記録 弘化二年稿

(二) 本草研究書

1 救荒本草略説 十四卷 島原藩命に因る

嘉永四年稿

2 救荒野譜略説 一卷 嘉永四年稿

3 救飢草木考 一卷 嘉永四年稿

4 蘭譜草稿 一卷

5 話湖魚考 一卷 琵琶湖産魚類考誌

嘉永四年稿

6 小石川植物園草木図説 七卷

7 " 目録 二卷

伊藤圭介との共著 大形刊本

(三) 紀行隨筆雜著

1 瀬戸内海東海道紀行

2 漫遊植物図説 日向地方採集記

3 東遊植物雜記 二十五卷 道中植物研究録

4 上州黒滝山紀行 一卷 明治十九年稿

5 小笠原島航海紀聞 一卷 明治十四年稿

6 百科節用植物各種稿

7 百科節用植物篇 三卷迄

現今の植物百科辞典、リンネの分類法を取入れ五十音順に

項目を立て、ある。未定稿

(四) 写生帖及び写生図 実数二千枚

昭和卅七年大分県植樹祭の時両陛下の御覧に入れた。皇后陛下  
は久邇宮家で飛霞の「百花百虫図」を既に御覧になつていら

たと。飛霞既に画家として一家を成していると誇称されるが全面に漂う気品に溢れて真に迫るものがあり現在の写生図版より遥かに秀れている。

### (五)伝記類

1 錦堂伊藤老先生履歴 伊藤圭介の伝記

2 謹対録 一卷 上記の註釈書

### (六)医書の註釈書 他

1 婦嬰新説便蒙 2 内科新説便蒙

3 西医略論便蒙 4 全体新論便蒙

5 石花山莊集 明治四十三年刊

飛霞佐之両先生の漢詩和歌を一冊にまとめたもの没後嗣子榮

二郎氏が上梓した。

### 附記

賀来家には飛霞遺稿以外に「大分県多氣書齋集」全二十巻を秘蔵してある。梅園、万里、東嶠、圭介、関謙平、その他当年名流の飛霞宛書かんを卷子本に仕立て、ある。梅園、万里のものは小曲精一氏の書かん集に集録されている。

学統を挙げると父有軒は三浦梅園、小野蘭山に師事、医療、本草を研究した。兄佐之は帆足万里、シイボルトに学び、島原藩医で島原

領下で種痘、解剖、薬園再興（国指定）の業績顯著である。飛霞は帆足万里、山本亡羊、十市石谷に從学し医業、本草研究、写生画に秀れた才能を現した。

飛霞は蒲柳の質であった。摂生をし、少食酒を嗜まず、少量の喫煙を楽しんだ。温厚篤実円満玲瓏の人格者と慕はれた。その為長命もしたが努力孜孜として倦まず終生博物研究と写生を寸時も忘れず一瓢一材全国を周遊して各地の学者同好と交を深め民俗、鉱物、動物、奇石、等に至る迄深く業績を残した。今日郷党の田夫野人に至る迄「飛霞先生」と敬慕されその画は小品でも必ず一幅を所持する事を誇りとされている。日本植物学会の創立者の一人で近代植物研究の育ての親の一人でもある。牧野富太郎、向井光太郎博士等日本に於ける動植物学者としての権威者も飛霞の影響を受けた後学である。伊藤圭介（尾張）飯沼慾斎（美濃）賀来飛霞（豊前）を幕末から明治初期にかけての三大本草家と誇称される所以である。

周遊地方を遺稿に拠って挙げると阿波、京師、琵琶湖畔、美濃尾張、木曾中山道、東海道、東京、上州黒滝山、日光、奥羽地方（奥羽地方周遊には三年を費した。年譜に記したがこれは最近全家から古川古松軒の「東遊紀行」の写本六巻が発見され又遺稿「名勝真景並奇器図」、「奥羽紀行」等があるので立証出来た。松島の写生図断

片も坊間に残っていて表奥羽から日本海側を南下し新潟、富山、福井と周っている。晩年に黒滝山、小笠原島を採集した。九州では由布嶽、杵築、鳥原の採集記と日向採集記全五巻を残した。殆んど日本全土で記録のないのは北海道と山陰のみとなる。

これは賀来一門の性格柄か自家宣伝等全くやらない為か余り顕彰されたと言えないのであるが、伝聞しては、この仮村を訪ねた学者文人は多数に上っている。古く郷土史家の小野精一、十時英司、三重野寺史、久多羅木儀一郎、吉岡成夫（門司松ヶ枝郷土史会）、宮久三千年（中津出身、愛媛大教授、鉱物学専攻）山中八郎（文博、国史特に甲冑研究の権威、元東大総長松井直吉氏の八男とか）徳島大教授某氏（失名農博、植物学会創立者としての飛騨研究）宮沢文吾（別府温泉熱植物研究所長農博）大塚富吉、立川輝信、等々の諸氏があり宮崎県側では単に関係ある日向採集記が唯一の文献として持て囃され刊本がないので十数氏が筆写してをり、僕も一部筆写所持している。「宮崎図書館本」である。宮崎図書館の樋渡正男、日野巖博士、「日向文献資料」編者の（失名）それから数年前から宮崎総合博物館の沢武人氏が最も熱心で全所盛大な飛騨展を開催されたが「日向採集記の周辺」と題し全百十一回毎回写真入りの巨編を延岡の夕刊デリーに連載された。

最近では東京女子聖学院大学の山下愛子女史（科学史専攻）と梅園研究の文博高橋正和氏が最も熱心に賀来邸に泊り込みで筆写研究されつ、ある。そして先五月五日には辛島詢士博士と高橋先生の御案内で東大教授吉在由重御夫妻東京女子大の小川晴久氏が来邸された。

この様に最近飛騨の業績も漸く学界の注目を集めつ、あるが従来飛騨採集の鉱物とか写生画の一部たとえば魚類とか植物とか部分的に調べられた人はあつたが飛騨終生の全業績と人物について総合して調査した人はなかつた様である。我々郷土人として甚だ遺憾であつた。昭和四十六年十一月宮崎県総合博物館で日向採集の貴重文献の著者飛騨を顕彰しようとする企画が実つて賀来邸に眠っていた賀来飛騨の遺稿遺品、写生画数百点の展覧会が開催され沢武人氏編の「日向採集記の周辺」が新聞連載されるやら盛況を極めた。同館では特に「列品目録と特展概要」「高千穂採集記の周辺解説」を発売して配布したがこの展覧会を機として遺稿中僕等の気のつかないものが数篇発見された。

特に「南遊日記別記」「日州草木図」「写生図」「中山道木曾日記」「東京再遊日記」「遊尾漫録」「物産寄聞」「無人島漂流記」「女遊雜記」「遊湖日記」「東京紀行」等があつた。

又宮崎展に残れているものを挙げると

大塚富吉先生の蔵「名勝真景並奇器図」がありこれは奥羽地方採集の小旅行記で各地の民具等を写してある。

又僕の蔵しているものに「物産紀聞」なる小冊があり奥羽北陸周遊の際の携帯用メモ帳である。「写真図符合併説」八枚は郷土草木を研究してある。又今度賀来家から新に発見されたものに「奥羽紀行」は単稿の断片八枚密字で奥羽北陸周遊の唯一の日記で貴重な文献である。「錦箏老先生履歴書」は廿三葉で飛霞が小石川植物園勤務中伊藤圭介翁より資料を買って書いた圭介の伝記で未発表吉川弘文館人物叢書の「伊藤圭介」にも参照されなかつたものである。全書には数年間親交厚く学友であつた飛霞と圭介の関係については僅か二ヶ所一寸触れているのみで賀来家の資料は全く使っていない。賀来家には圭介翁より飛霞宛の書かんが拾数通残つており「百花山荘」の題額は圭介翁の特色ある筆致である。

又「飛霞翁伝」は全七巻、明治廿七年九月と署名があるが筆者の署名はないが筆致から僕は嗣子築二郎氏が歿後直ちに資料をまとめて伝したものと推定している。この伝記が宇都宮健哉撰の碑銘や「大分県偉人伝」の原本である事はうなづける。

又年代不明であるが飛霞の調査筆記である「佐田村産植物概略」十五巻があり通計五三六種の植物を筆記してくれてある。貴重な

記録である。

飛霞遺稿の刊本となつてゐるものは小石川植物園草木図説七巻と同目録二巻百花山荘集一卷のみであつたが今度日向採葉記が三一書房刊の「日本庶民生活史料集成」中に採録された。沢武人氏の雄篇「日向採葉記の周辺」も新聞連載のまま未だ出版の計画が立っていないのは残念である。多くの貴重な遺稿は賀来家の篋底に眠つたままである。飛霞遺稿は殆んど散逸せずに残つてゐるが先々代築二郎氏先代元吉氏と保存に氣を使つていたとの事である。安心院町教委では昨年九月やつと町文化財に指定した（遺稿と画譜全部）。保存と顕彰に微力を尽そうと云う訳であるが此程度でよいものではない。帆足万里全集上巻に医学啓蒙解題と題し万里の記述があるのは甚だ有名である。

「余三十六七ノ時泰庵老人（註飛霞の父有軒）賀来生（兄佐之）ヲシテ余ニ從学セシメ幾程モナク老人病歿シテ未療治ヲモヲシエヌユエ余初テ医書ヲ読テ方証ヲ説キ藥効ヲ論シタリ、比時蘭書ハ田舎ニハ解体新書ト内科選要ノ半分ハカリ上木シテ有リシ比也、田舎ノコトユエ病人モ時時來テ治ヲ乞フ、乃チ是ヲ治メシム、日野生傍觀シテ是ヲ学ハンコトヲ乞フ、二人ニ教ユル内坂本生モ是ニ從ヒタリ、診味腹舌喉誠ニ老嫗ノ小兒ヲ教ユル如クセリ、……

寒郷ニハ善キ顕微鏡ナキユエ日野賀来ニ生ヲシテ長崎ニ学バシム  
(鳴滝学舎シイボルト先生)云々とある。

帆門医学は賀来日野二生を教育する事より始つたのである。子息に医学を授けてくれと云う太庵から万里宛の書かかも賀来家にある。

日野鼎哉は京都に於て除痘館を開き救済に功績ありとて贈従五位の恩典に浴しているが賀来飛霞には未だその事がない。大正九年豊前平野陸軍特別大演習の際贈位申請書を出したとの事であるが陛下行幸中止で贈位の件も取止めとなつた由である。

帆門十哲と誇称された学者の方々に異を称へるものではない。

然し賀来佐之飛霞兄弟の如きその人格に於てその業績に於て何等十哲に劣るものでなく寧ろその上に在りと申したい。佐之に就ては長崎県側に於て入江滑先生の如き篤学の士があつて「墨耳古新話」を出版され佐之著の島原の漂流人太吉のメキシコでの漂流奇談を軸に絵入りの同標題の解説書に附するに佐之の業績として「種痘医療の効績」「菜園再興」「解剖」等項目を分つて詳記しその業績を高く評価している。記載洩れたが廿数年前呉秀三博士の大著「シイボルト先生その生涯と功業」なる書が発刊されたが門人列伝中賀来佐之飛霞の伝を掲げられてある。

長崎県宮崎県側に於て佐之、飛霞の遺稿が紹介研究され顕彰が進んでいて大分県側が此ままでよい筈はない。県側に於ても遺稿や画譜が完全に散逸せずに賀来家に現存しているのであるから文化財にも指定し遺稿の出版顕彰等について出来る限りの事をして貰いたくそれは我等の責任でもある。

安心院町文化財調査員

全町旦尾一九〇